

聖書：マタイ 27：27～44

説教題：他人は救ったが

日時：2020年9月20日（朝拝）

今日の箇所にはイエス様がローマ総督ピラトによって十字架刑の判決を受けた後の様子が描かれています。まず総督官邸での兵士たちによる虐待のことが記されています。イエス様の十字架刑が決まると、イエス様は総督官邸へ連れて行かれて、そこに兵士たちの全部隊が集められました。そしてはや死ぬだけの人に対するやりたい放題の凌辱が始まります。イエス様はまず着ていたものを脱がされました。そうかと思うと、今度は緋色のマントを着せられました。これは兵士の中でも位の高い軍人や役人が身に着けていたもののようです。なぜこれをイエス様に着せたのでしょうか。それはイエス様を王様に仕立てるためです。王は紫の着物を着たようですが、それに幾らかでも近い色ということで、彼らはこれをイエス様に着せました。また頭には茨で編んだ冠をかぶらせませす。そのとげは頭に刺さり、イエス様を傷つけたでしょう。右手には葦の棒を持たせませす。王様の杖の代わりです。そして彼らはイエス様の前にひざまずいて「ユダヤ人の王様、万歳」と言います。もちろん拝むためではなく、からかうためでした。そして持ち上げたかと思うと、次にはイエス様に唾をかけ、さらには持たせた葦の棒を取り上げて頭をコンコンとたたいた。このような虐待は前にもユダヤ人の裁判後に行われました（26章67～68節）。そこでも彼らはイエス様の顔に唾をかけました。またこぶしで殴り、平手で打って、誰が打ったか当ててみる！と言いました。今日の箇所でこのことをしたのは総督の兵士たち、外国人です。彼らにとって、これは日頃から手を焼いているユダヤ人への憂さ晴らしのようなものであったのかもしれませんが。あるいはこれから最悪の仕方で死刑にされる人への徹底的ないじめ、いたぶりであったとも言えます。

私たちは自分がこのような扱いを受けたら、どんなにみじめな気持ちになるかを考えてみるべきだと思います。力づくで裸にされ、着せ替え人形のように弄ばれ、拝まれたかと思えば唾を吐きかけられ、頭を棒でたたかれる。またこれと合わせてここにいたのは誰だったのかを私たちは良く心に留める必要があります。後でもう一度、この点に戻りますが、ここにおられたのは神の御子なる方でした。私たちと同じ人間性をまとって地上に来られた一人子の神。その方が甘んじてこれらの虐待を受けられました。これまでもイエス様は不当な訴えがなされても口を開かず、黙って耐え忍ばれました。前回のローマ総督の前での裁判においても沈黙し続け、十字架刑の判決を受け、その後には恐

ろしいむちも受けました。そして今日の箇所でもこのような扱いを受けられました。主は何という扱いを忍ばれたことでしょうか。これらの仕打ちを黙って耐えられたのは誰であったのか、ここにいた方はどなたなのか。私たちはそのことを良く覚えつつ、この場面を読むことが大切だと思います。

さて兵士たちはこのようにからかって後、イエス様を十字架につけるために出発します。32節にはクレネ人シモンに十字架を無理やり背負わせたことが書いてあります。なぜこのことが必要だったのでしょうか。それはイエス様が自分でこれを担ぐことができない状態に至っていたからでしょう。本来は十字架にかけられる人、その人自身が自分の十字架を背負って刑場まで歩いて行くのが常でした。しかしイエス様は前日の夜に捕らえられてから夜中じゅう引き回され、一睡もしていなかったと思われます。大祭司カヤパのところへ連れて行かれたことがこの福音書に書かれていましたが、他の福音書によると、その舅アンナスのところにも連れて行かれたことが書いてあります。その上でローマ総督ピラトのもとへ連れて行かれました。他の福音書によると、ピラトは自分が判決を下すことを嫌がり、地方国主ヘロデのもとへイエス様を送ったことが書いてあります。しかしそこで最終判決は下されず、イエス様は再びピラトのもとへ送り返されて来ました。こうして一晩中引き回され、その上、むちで打たれ、さらにここでも虐待を受けたイエス様は、十字架を背負って歩くことなどとてもできない状態に至っていたのだと思います。

しかしだからと言ってローマの兵士が代わりに十字架を負うことはしません。彼らはそこにいたクレネ人シモンを捕まえて彼に背負わせます。平行記事のマルコの福音書15章21節には、クレネ人シモンについて「彼はアレクサンドロとルフォスの父」と紹介されています。その子どもたちの名前がこのように詳しく記されているのは、おそらくその福音書が読まれた当時、彼らがキリスト教会で良く知られた人たちだったからと思われます。おそらくクレネ人シモンは、この出来事がきっかけとなって主を信じる信仰者になったのではないかと言われます。そしてその子どもたちも福音書が書かれる頃までには信者となり、人々に良く知られている者たちになっていた。マタイはそこまで詳しく述べていませんので、私もここではそれ以上は触れません。ここで心に留めたいのは、イエス様はここまでの扱いを通して、とても何かを背負って前に進むことなどできない状態にまでなっていたということです。いかに厳しい扱いをイエス様はすでにここまでの間に受けられたのか、それを耐えられたのかを心に留めたいと思います。

そうしてついに十字架刑が執行される場所に到着します。それはゴルゴタと呼ばれる場所でした。この記事で注目に値することは、四福音書すべてに共通しますが、イエス様の十字架刑における肉体的な苦しみや、その傷のドロドロとした描写がほとんどないことです。時々十字架の箇所から説教する人は、十字架刑がいかに残酷な刑であるか、特にその肉体的な痛み苦しみについて克明にリアルに語る人がいますが、聖書記者たちはそうはしていません。ここでも十字架刑については 35 節に「彼らはイエスを十字架につけてから」と一言サラッと書くだけです。もちろんイエス様は私たちと同じ人間性を取られた方として、私たちが十字架にかけられた場合と同じ肉体的苦しみをその身に受けられました。しかしその肉体的苦しみを十分に描けば、イエス様の十字架の意味が分かるわけではない。イエス様の十字架はそれ以上の意味を持っています。そのことに福音書記者たちは私たちの思いを向けさせようとしているのでしょう。

ではマタイがここで書いていることは何でしょうか。それはまず兵士たちがしたことです。彼らはイエス様に苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとし、またくじを引いてイエス様の衣を分けました。これらはいずれも旧約聖書の詩篇で預言されていました（詩篇 69 篇と 22 篇）。そしてイエス様の頭上には「これはユダヤ人の王イエスである」という罪状書きが掲げられました。これはユダヤ人がイエス様をローマに訴えた時の内容です。この理由でイエス様は死刑判決を受けました。ですから正当な罪状書きです。しかしそれはあまりにも滑稽で皮肉めいた罪状書きでした。王である者がどうしてこんな目に会っているのか。これのどこが王なのか。嘲笑的に扱うことができます。そしてこれによってユダヤ人を辱めることができます。こうしてイエス様は十字架にかけられつつ、嘲られたのです。そのイエス様は二人の強盗の間に張り付けにされました。ユダヤ人の王が強盗と一緒に処刑されようとしている。これもある観点から言えば面白おかしい姿です。しかし実はこれも旧約預言の成就と言えるものでした。イザヤ書 53 章 12 節にやがて現れるメシヤについて、彼は「背いた者たちとともに数えられたからである」という言葉がありました。イエス様はまさにここで背いた者たちとともに数えられ、彼らの中の一人とされました。しかしそこには救済的な目的があることをイザヤ書 53 章 12 節は続けて語っています「彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする」と。その深遠な真理がこうしてここに示されてもいたのです。

次にマタイが書き留めているのは通りすがりの人たちの姿です。彼らは頭を振りなが

ら、イエス様をののしりました。「神殿を壊して三日で建てる人よ」と彼らは呼びかけましたが、前回も見ましたように、イエス様は決してそのようなことは仰いませんでした。ユダヤ人たちが都合の良いようにイエス様の言葉を捻じ曲げて解釈した言葉でした。彼らはその言葉をもって非難しながら、「もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」と罵ります。これを聞いて皆さんはどこかで聞いた言葉のようだと思いにならないでしょうか。それはこの福音書4章の、荒野におけるサタンの言葉です。あの時、悪魔は、あなたが神の子なら石をパンに変えてみよとか、ここから下に身を投げてみよ、などとけしかけました。それによって言わんとしたことは、あなたは神の子の力を発揮して自分の栄光を現したらどうか！ということでした。十字架の道など行く必要はない。今すぐ栄光の状態を楽しめ！ということでした。それによってサタンは神の救いの計画を転覆させようとしてきました。ここでも同じです。サタンは通りすがりの人さえ用いて、形を変えて、最終的誘惑をイエス様に仕掛けたのです。そこから降りてこい！神の子の力をそこに現してみよ！と。

次に出て来る祭司長や律法学者、長老たちのあざけりも同じです。42～43 節：「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」 「他人は救ったが」とは、イエス様がこれまで多くの人々を助け、また癒して来たみわざを特に指しているでしょう。そのことはできても自分は救えない。彼は自分をイスラエルの王だとしている。ならばそこから降りてもらおう。そうしたら我々は信じる、と。彼らの考えの基本にあるのは、神に祝福されている人は苦しみから助けられるはずだということです。神はご自分の愛する人、お気に入りの人は成功に導くはずである。だから成功や祝福から程遠い状態にあるあなたは、神のお気に入りでも何でもない。もし本当に神の子であるなら、神に救い出してもらうことによって、そのことを証明して見せよ、と。最後の44 節には一緒に十字架につけられていた強盗たちも同じように罵ったとあります。こうしてイエス様はあらゆる人々から拒絶され、ののしられ、嘲られたのです。

私たちは以上の箇所をどう読むべきでしょうか。イエス様は十字架上ですべての人々からののしられ、嘲られて、なす術がない無力で悲惨な状態にあったということをこの箇所は語っているのでしょうか。そうではありません。これはイエス様にとって究極的な試練の時でした。イエス様は降りようと思えば、もちろんここから降りることができ

ました。これまであらゆる人々の病を癒し、悪霊を追い出し、ガリラヤ湖の嵐を一言で静め、死人さえも生き返らせた方が、ここから降りられないはずがありません。それはイエス様にとって最も簡単な道を行くことであり、楽な選択です。しかしもしそのようにご自分の力を使ってしまえば、この世に来た目的を果たすことができなくなります。イエス様がこの世に来たのは、罪人を救う贖いの代価としてご自身のいのちをささげるためです。神の救いの計画におけるこの最も肝心の部分が達成されないことになってしまいます。ですからイエス様は降りられたのに、降りなかったのです。恐ろしい苦しみを経験している中であっても、また人々から嘲られ、ののしられ、降りられるものなら降りてみよ！とけしかけられても、その道を行かなかったのです！ある学者は次のように言いました。イエス様を十字架上に留めさせたものは何か。それは釘の力ではない。それは愛の力であった。イエス様は私たちを救わんとするその愛の力によって、十字架から降りずに、そこにとどまり続けてくださったのです。

ですからこれは弱い人の姿ではなく、この上なく強い人の姿です。祭司長たちが言った「他人は救ったが、自分は救えない」という言葉は、ある意味で真理を語っています。「他人を救うためには、自分は救えない。」これはイエス様が選んだ道です。しかし「自分は救えない」と表現すると、まるでイエス様が弱いかのようにも聞こえます。ですから正しく言い換える方が良いと思います。イエス様は他人を救うために、自分を救わなかったのである、と。「救えない」のではなく、「救わなかった」のであると。

そして私たちは最初にも触れたように、十字架上にいたのは神の御子であったことを十分に思い巡らすべきです。ここでこの苦しみを耐え忍んだのはただの人間ではありません。ただの人間には決してこのようなことはできませんでした。恐るべきことに今日の箇所でも裸にされ、着せかえを強いられ、唾をかけられ、棒でたたかれたのは、神の御子なる方でした。十字架の木に打ち付けられ、ののしられ、非常な苦しみの中でもそれらに耐えて、そこにとどまり続けてくださったのは一人子の御子なる神でした。何とかがこの歴史の中に起こったと言うべきでしょうか。しかしそうであってこそ、この方がもたらす救いは、どんなにひどい罪人さえも救い出すことができます。この私がかたとえどんなに罪深い人間であっても、神の御子が払われたこのとてつもない犠牲によるなら、必ず救い出していただくことができる。そして主はあらゆる罪の呪いと災いから私たちを救い出し、ご自身が治める天の御国へと導き入れ、祝福してくださいます。

私たちはそのような目をもって十字架の主を仰ぎ、十字架の主を誇り、十字架の主に感謝したいと思います。主はそこから降りることができたのに、私たちの救いに必要な代価を払うため、そこにとどまり続けてくださいました。そして次回の箇所ですべてご自身の全てをささげてくださいます。これは主が愛によって私のためにしてくださったことであると受け止め、主が備えてくださった救いを感謝して受け取る者とされたいと思います。そしてやがて復活を通して明らかにされる、神が立てたこのまことの王によって守られ、救われ、永遠の御国に生きる者とされる神の民の幸いに歩む者とされたいと思います。